

消えるべき Double-“The End of the Party” 再読

藤 田 眞 弓

The Other Half of the Double Must Die: Rereading Graham Greene’s “The End of the Party”

Mayumi FUJITA

要 旨

Graham Greene の短編 “The End of the Party” (1929) は、双子が主人公であることから、その先行研究には double モチーフに注目したものや、双子の “childhood fear” に注目した精神分析批評的アプローチを試みたものが見られる。これらの先行研究において議論の中心になるのは多くの場合弟 Francis の異常なまでの恐怖や不安である。しかし、本稿では実は兄 Peter も Francis 同様に強烈な不安や恐怖を抱いていたこと、しかも、二人の恐怖はそれぞれ異なる要因により生じていたものであることを検証する。

キーワード：イギリス文学、Graham Greene、短編小説、精神分析批評、ダブル・モチーフ

序

Graham Greene の “The End of the Party”¹ は1929年に発表され、1947年に *Nineteen Stories* に、1954年に *Twenty-One Stories* に収録された、Greene が弱冠25歳の時に書かれた短編小説である。Vintage 版でわずか10ページ程の短編である本作には、その後の Greene 作品に繰り返し現れるテーマやモチーフが見られることから Greene の作品群を研究するにあたって軽視できない作品であ

ると言えるであろう。²

本作に現れる、作者 Greene 自身も取り憑かれていた死に対するオブセッション、子供時代の暗い思い出は言うまでもなく、神経質で重圧に苦しむ男性（本作の場合は少年であるが）と男性のそのような状況には無関心で鈍感な女性、時としてあてにならない宗教や神、などのテーマは Greene 作品にはよく見られるものである。更に Atkins が指摘するように、そのタイトルが示唆するような *The End of the Affair* (1951) との共通点も非常に興味深い。Atkins の指摘する共通点とは、例えば、強い愛情故に愛している相手を死に追い遣ってしまう主人公、愛する相手の死後も愛し合う二人（異性愛であれ、兄弟愛であれ）はコミュニケーションを取る事が出来ること、死への欲望（タナトス）などが両作品にみられるという点である。“The End of the Party” はこれらのテーマを 9 歳の双子の少年を主人公に展開しているが故に情熱や説得力を欠いているのだが、これらの要素を Greene は *The End of the Affair* で発展させたと Atkins は述べている (Atkins 23)。

主人公は双子の兄弟 Peter と Francis。物語は彼等が Colin Henne-Falcon の誕生日パーティに行く 1 月 5 日のたった一日のうちに起こった出来事を扱う。Colin Henne-Falcon の誕生日パーティで行われるかくれんぼ (hide-and-seek) を恐れ、パーティに行きたがらない弟 Francis と、彼を守ろうと奮闘する兄 Peter の様子が物語の中心であるが、最後には暗闇の中で弟を安心させようとした兄 Peter に触れられた Francis はあまりの驚きの為に死んでしまう。

本作は、双子が主人公であることから、その double もしくは quasi-double のモチーフ³、又は彼等双子（とりわけ弟 Francis の）の “childhood fear” に注目をした精神分析批評によるアプローチが、例えば Roland A. Pierloot や阿部曜子氏などにより試みられてきた。また、従来の先行研究においては、Peter は、Francis の異常なまでの恐怖や不安から彼を救おうと奮闘する責任感の強い兄というキャラクターであるとした上で議論を展開しているものが多く見られる。しかし、本稿では主人公の双子がお互いに恐怖をはじめとした感情を反映し合える故、テキストに現れる恐怖がどちらのものなのかの境界が曖昧であり

ながらも、実は Peter 自身も Francis 同様に強烈な不安や恐怖を抱いていたこと、しかも、二人の恐怖はそれぞれ異なる要因により生じていたものであることを提唱したい。そこで先ず Francis の恐怖がどのようなものであるかを、精神的アプローチを用いた先行研究に依拠しながら確認し、これまで中心的には論じられることのなかった Peter の恐怖を心理学的に解釈したい。

1. Francis Morton の「恐怖」

Francis は異様なまでに Colin Henne-Falcon の誕生日パーティに行く事を嫌がっているが、その理由は暗闇の中でのかくれんぼの際、真っ暗な家の中で Peter と離れ離れにされる恐怖故である。これに加え、Joyce や Mabel Warren といった年上の少女たちの前で恥ずかしい思いをしたくない気持ちも彼がパーティに行きたくない要因の一つである。

“I don’t want to go,” Francis said suddenly. “I suppose Joyce will be there...Mabel Warren.” Hateful to him, the thought of a party shared with those two. [...] The long pigtails swung superciliously to a masculine stride. Their sex humiliated him, as they watched him fumble with his egg, from under lowered scornful lids. And last year...he turned his face away from Peter, his cheeks scarlet. (“EP” 193)

この引用からは Francis が少女たちから軽蔑されるのを恐れていることだけでなく、少女たちが異性であることを強調する “Their sex humiliated him” という表現から彼が異性に対して嫌悪感を抱いていることも分かる。Francis の女性嫌悪は、彼の母親とのやり取りに於いても見られる。

He was nearly overcome by the desire to run back into the house and call out to his mother that he would not go to the party, that he dared not go. They could not make him go. He could almost hear himself saying those final words,

breaking down for ever the barrier of ignorance which saved his mind from his parents' knowledge. "I'm afraid of going. I won't go. I daren't go. They'll make me hide in the dark, and I'm afraid of the dark. I'll scream and scream and scream." He could see the expression of amazement on his mother's face, and then the cold confidence of a grown-up's retort. ("EP" 195)

決して愛情深いとは言えない母親と自分の間にある「壁」を崩壊させる、つまり暗闇でのかくれんぼが怖いという秘密を彼女に暴露するくらいなら、その恐怖しているかくれんぼが行われるパーティに行く方がましだという Francis の強い意志は “he couldn't bring himself to lay bare his last secrets and end reserve between his mother and himself” (“EP” 195-96) と表現を変えて繰り返し現れている。この、母親とのやり取りを通して、Joyce や Mabel Warren といった年上の少女たちに対する反応に見られたように、異性から軽蔑されることを Francis が恐れていることを窺い知ることができる。更に、これらの引用箇所からは Francis の恐怖を考察するにあたってもっと重要なことが見えてくるのである。それは、Francis の暗闇に対する恐怖が、母親への胎内退行（子宮回帰）と繋がっているということである。この Francis の母体退行の恐怖を、阿部曜子氏は次のように解釈している。

フランシスの恐れる暗所、閉鎖的な狭い空間、これが象徴するものはやはり母の胎内であろう。フランシスの暗闇恐怖症は母胎退行（回帰）と深いところでつながっているのではないか。それは強烈な子宮回帰願望の裏返しとしての子宮脱出願望ともとれるが、兄との強い結びつきを考えるなら、一人で母胎（暗闇）に身を置くことへの不安や拒否とみなす方が自然であろう。実際に胎児の時は母の中でずっと兄ピーターといっしょだったのに、今度はたった一人で暗闇の中にいなければならない。それはフランシスにとって耐え難いことだった。フランシスの暗所恐怖症は、自分が生き続けるのに必要不可欠だと信じているもの（ピーター）から引き離さ

れることへの不安、いわゆる分離不安に基づいている。(阿部 49-50)

阿部氏は Francis の母胎退行の恐怖は Peter と分離される恐怖に起因していると解釈しているが、Francis が恐れているのはむしろ、彼と一体化することではないだろうか。

“It will be a bad cold if I go to the party. Perhaps I shall die.”

“Then you mustn’t go,” Peter said, prepared to solve all difficulties with one plain sentence, and Francis let his nerves relax, ready to leave everything to Peter. (“EP” 193)

Francis はパーティに行きたくない理由を「風邪を引いたから」とのみ説明し、パーティに行かなくてはならない状況の回避を Peter に委ねている。このように Francis はただただ恐怖を抱くのみで、Peter が自分を守ってくれると信じてその恐怖を克服しようとしめない。事実、一度状況回避の為に、自ら Henne-Falcon 夫人に直接「訴えるという最後の手段」(“EP” 196) に打って出るが、その策が功を奏さなかった時も自分の失敗を認めようとはせず、Peter が自分の置かれている状況と気持ちを察して何とかしてくれると思っている。

He [Francis] stood motionless, retaining, though afraid, unmoved features. But the knowledge of his terror, or the reflection of the terror itself, reached his brother’s brain. For the moment, Peter Morton could have cried aloud with the fear of bright lights going out, leaving him alone in an island of dark surrounded by the gentle lappings of strange footsteps. Then he remembered that the fear was not his own, but his brother’s. (“EP” 197-98)

Francis の置かれている状況と彼の恐怖を感じ取った Peter は引き続き暗闇でのかくれんぼを回避すべく奮闘する。ここで留意しておかなければならないこ

とは、Peter が感じ取ったとされる恐怖が果たして本当に Francis のものかどうか、ということである。Francis のものとして語られている恐怖が、実は Peter 自身が感じたものであると解釈させる余地をテキストは残しているのであるが、Peter の恐怖については次の項で詳しく分析することにする。

To address Peter was to speak to his own image in a mirror, an image a little altered by a flaw in the glass, so as to throw back less a likeness of what he was than of what he wished to be, what he would be without his unreasoning fear of darkness, footsteps of strangers, the flight of bats in dusk-filled gardens. (“EP” 196)

Francis は Peter のように暗闇を恐れない強い男の子になりたいと思っているというよりはむしろ、なりたい自分、「理想的自己像」(阿部 54) の対象となる存在を欲しているのである。従って Peter のように「暗闇や、見知らぬ人々の足音や、黄昏の庭を飛び回る蝙蝠に対する恐怖を持たない」(“EP” 196) 人間になろうともせず、自分を恐怖から守ってくれる役割を Peter に押し付けようとする。もしも自分が Peter と一体化してしまうと、自分を守ってくれる存在を失うことになってしまうからである。以上のことから、Francis は Peter との分離ではなく、むしろ彼との一体化を恐れていると解釈することが出来る。

Francis は先に触れた Henne-Falcon 夫人への直談判の件以外は至って受動的で、状況を回避したり、暗闇に対する恐怖を克服しようとしたりもせず、物語の冒頭で Francis が、自分が死ぬ夢を見ていたことによって示唆されている自身の結末、つまり「死」に向かってまっしぐらに進んでいるように思われる。

自分の double に出会う事は死を予兆すると民間伝承で信じられているように⁴、Greene の double もしくは quasi-double のテーマを持つ作品においては、結末で必ずそのどちらかが死ぬ。“The End of the Party” でその運命にあるのは Francis であるが、先に触れた物語冒頭の夢や彼自身が「自分は死ぬ」と発言していること(“ ‘It will be a bad cold if I go to the party. Perhaps I shall die.’ ” [“EP”

193]) のみならず、“The End of the Party” のテキストには Francis の死の予兆が充満している。先ず、本テキストを「透明な」読み方をした際に浮かび上がるのは Francis が心臓に問題を抱えていた可能性である。

It was true he felt ill, a sick empty sensation in his stomach and a rapidly beating heart, but he knew the cause was only fear, fear of the party, fear of being made to hide by himself in the dark, unaccompanied by Peter.... (“EP” 194)

But Francis was silent, feeling again the jump-jump of his heart, realizing how soon the hour of the party would arrive. (“EP” 195)

His heart beat unevenly, but he had control now over his voice, as he said with meticulous accent, “Good evening, Mrs. Henne-Falcon. It was very good of you to ask me to your party.” (“EP” 196)

テキストには少なくとも 3 度、Francis の心臓の動悸が激しくなったり、彼の心臓が不整脈を打ったりしている様子が出てくる。原因は勿論、暗闇でのかくれんぼに対して感じている恐怖であるが、その恐怖に対して他の身体反応(例えば汗をかく、震えるなど)は全く無く、専ら心臓にのみその反応が出ていることから Francis が心臓に問題を抱えていた可能性は否定できないのではないだろうか。

双子の兄弟のうち、Francis が死ななくてはならない理由はテキストに彼の「居場所」が無いことにもあると考えられる。Francis の胎内退行について触れた際、彼が両親との間の壁を壊したくない、彼等と距離を保ちたいと思っていることは既に述べた。これに加え、彼は大人に対して不信感を持っているのである。

“Don’t be silly. You know there’s nothing to be afraid of in the dark.” But he knew the falsity of that reasoning; he knew how they taught also that there was nothing to fear in death, and how fearfully they avoided the idea of it. (“EP” 195)

この引用中の “they” は Francis の両親のみというよりかはむしろ「大人全般」を指すと考えられ、従ってここでは Francis が大人の「理論の欺瞞」(“the falsity of that reasoning”)を見破っているのである。この他にも母親が彼を諭す時に話す口調が “the cold confidence of a grown-up’s retort” (“EP” 195) であると Francis は感じている。

ここまで強く大人に対する不信感を露にしながらも、Francis は子どもらしくない子どもとして描かれている。先に引用した、彼が Henne-Falcon 夫人に挨拶をした場面の続きを引用する。

With his strained face lifted towards the curve of her breasts, and his polite set speech, he was like an old withered man. (“EP” 196)

ここでの彼の姿は「萎びた老人のよう」とであると描写され、この後最後の策として Henne-Falcon 夫人に「僕はかくれんぼに入らない方がいいと思う」(“ ‘I think I had better not play.’ ” [“EP” 197]) と訴える口調は「他の子どもたちが高慢の象徴だと思って忌み嫌っている正確な口調」(“the precise tone which other children hated, thinking it a symbol of conceit” [“EP” 197]) と表現されている。事実、Colin Henne-Falcon の誕生日パーティにおいて兄 Peter を除いて彼の相手をしようとする子どもは一人もいない。

Francis が大人に対して不信感を持ちつつも、子どもらしく描かれていないことから “The End of the Party” のテキストが彼に居場所を与えようとしていないことが伺われるのであるが、このテキストの流れに逆らうかのように Peter は、Francis を助けようと奮闘するのである。

2. Peter Morton の「恐怖」

「謂れのない恐怖」(“unreasoning fear” [“EP” 196]) に怯える Francis とは対照的に、テキスト中至る所で Peter は勇敢で責任感のある人物であることが強調されている。Francis の恐怖に注目した精神分析的批評では、Pierlout の指摘のように双子の兄弟には正反対の性質が付与されている。

In this story the twins clearly represent opposite complementary poles. Peter is a rational realistic boy; by the strong bonds uniting them he experiences his brother's fears but his reactions are determined by rational strategies. The life of Francis is dominated by an emotional hypersensitivity resulting in obsessive anxieties. (Pierlout 137)

精神分析的批評を用いた先行研究では、Peter が感じる恐怖は全て弟 Francis の恐怖を感じ取ったものだとして解釈されてきたが、果たしてそうだろうか。この項では、兄 Peter 自身も何かに対して恐怖心を抱いていたこと、そしてその要因は Francis のものとは全く異質のものであることを検証したい。

見落とされがちなことであるが、物語の冒頭で「ハッと目を覚まし」(“EP” 192)、1月5日の重要性を認識しているのは Francis ではなく Peter である。

But the thought palled, and the mind went back to the fact which lent the day importance. It was the fifth of January. (“EP” 192)

そして彼は去年の Colin Henne-Falcon の誕生日パーティから早くも一年が経ったことを信じられないと感じる。

Peter's heart began to beat fast, not with pleasure now but with uneasiness. He sat up and called across the table, “Wake up.” (“EP” 192)

明らかに Peter は誕生日パーティに対して恐怖とまではいかなくとも不安を感じており、この時彼は「部屋全体が暗くなったように感じ、巨大な鳥が舞い降りてきたような感じがした」(“EP” 192) ののである。

But he was the elder, by a matter of minutes, and that brief extra interval of light, while his brother still struggled in pain and darkness, had given him self-reliance and an instinct of protection towards the other who was afraid of so many things.

“I dreamed that I was dead,” Francis said.

“What was it like?” Peter asked.

“I can’t remember,” Francis said.

“You dreamed of a big bird.”

“Did I?” (“EP” 192)

真っ暗な部屋や巨大な鳥のイメージは彼の不安の表象であるにも関わらず、Peter はそれを弟の夢に置換する。弟よりも数分早く生まれたことは Peter に “self-reliance” という性質を付与したのだが、それを実感、実践する為に彼は弟に「様々なことを怖がる、守ってやらなければならない存在」という性質を押し付けているのである。同時に、Francis の側でもその性質を受容し、本稿の前項で触れた通り、全てを兄に委ねているのである。

The fifth of January, Peter thought again, his mind drifting idly from the image of cakes to the prizes which might be won. Egg-and-spoon races, spearing apples in basins of water, blind man’s buff. (“EP” 193)

物語で最初に去年のパーティのことを反芻するのも Peter である。Francis は、まるで Peter のパーティに対する強い不安を感じ取り、それを自身に投影させるかのようにパーティには行きたくないと断言し、去年のパーティで暗闇の

中 Mabel Warren に触れられて悲鳴を上げたことを思い出す。Francis にとってこれは屈辱的な経験（“a shameful memory” [“EP” 193]）として記憶されているが、Peter にとっても弟を守ってやれなかったという、同じく屈辱的な経験であったはずである。故に Francis がパーティに行かずに済むいくつかの策を講じ、それらが失敗に終わった後も暗闇でのかくれんぼを阻止すべく画策する。しかしながら Peter の策はことごとく失敗に終わる。Peter の失敗の要因になっているのは、大人が言うことを素直に受容する彼の性格にあるのではないだろうか。かくれんぼを阻止しようとした時はそれが「Henne-Falcon 夫人のプログラムに入っているのなら自分が何を言ったところでどうしようもない」（“EP” 196-97）とその策を諦め、失敗を認めながらも奮起する時には大人が繰り返し言う言葉、「暗闇には怖いものは何も無い」を思い出すのである。散歩に出るのにも乳母の付き添いが必要な Francis に対して Peter は一人でウサギ小屋を仕上げる許可を貰っている。同じ 9 歳の少年であるが、Peter の方が着実に「大人の男」に向かって成長している印象を受ける。しかし、Peter にとって不幸なことに、物語には彼のロール・モデルとなる「大人の男」が不在なのである。物語に登場する大人は乳母、Henne-Falcon 夫人、双子の母と女性ばかりで男性登場人物は一人も居ない。（双子の父親に関する言及はあるものの、彼が実際に登場することはない。）作品が発表された1929年はイギリスをはじめヨーロッパの大国全てが参戦した the Great War、第一次世界大戦後のことであり、現実世界に於ける青少年のロール・モデルとなるべき男親をはじめとする大人の男の不在という問題が本作にもその影を落としているのであろう。

Peter stood apart, ashamed of the clumsy manner in which he had tried to help his brother. Now he could feel, creeping in at the corners of his brain, all Francis's resentment of his championing. Several children ran upstairs, and the lights on the top floor went out. Darkness came down like the wings of a bat and settled on the landing. (“EP” 198)

Peter が弟を守ることが出来なかったことを恥じていることは明らかであり、この時彼は暗闇を、物語の冒頭の「巨大な鳥」と同様に、今度は「蝙蝠の翼」のように感じている。このことから、「鳥」や「蝙蝠」のイメージは Francis のもの、というよりはむしろ Peter の不安や恐怖の表象となっていることが分かる。

真っ暗になった家の中で Francis を探し続ける Peter は幾度も恐怖を感じるがそれは Francis の恐怖が彼に伝わったものだと言分に言い聞かせる。しかも Peter に伝わった Francis の恐怖は “a burning panic” であるが、それは彼が受け取ると彼の中では “an altruistic emotion that left the reason unpaired” (“EP” 199) に変容していると言うのだ。Francis が耳を押さえ、目を閉じて暗闇の恐怖に耐えている一方で Peter はそんな弟を見つけ出し、安心させることでこれまでの失敗により失いかけていた “self-reliance” を挽回しようとする。Francis が Peter との同一化を恐れていたのと同様、兄としての “self-reliance” を保持する為に Peter には何かに対して恐怖心を抱くという自分の負の性質を押し付けられた「守るべき弱い弟」である Francis が必要であることから、彼を失うこと、または彼と同一化することを恐れているのである。

Peter の努力もむなしく Francis は暗闇の中で不意に身体を触れられたことにより死んでしまう。弟を助けることで、自身の “self-reliance” を挽回し、保持しようという歪んだ愛情故に double である弟を死に追い遣り、彼と一体化するという結果に終わってしまう。

Peter continued to hold the clenched fingers in an arid and puzzled grief. It was not merely that his brother was dead. His brain, too young to realize the full paradox, wondered with an obscure self-pity why it was that the pulse of his brother's fear went on and on, when Francis was now where he had always been told there was no more terror and no more darkness. (“EP” 200)

Francis の死により、それまでは双子故に個々に振り分けられていた異なっ

た種の「恐怖」を Peter 一人が引き受けることになり、ここから彼の “full paradox” な人間としての人生が始まるのである。

まとめ

先行研究に多く見られる精神分析的アプローチでは、双子の double モチーフに焦点が当てられ、暗闇に対して謂れ無い恐怖を抱く Francis は Peter の影の存在、つまり Peter の否定したい負の要素を付与されたキャラクターであり、その死は「自己同一化のプロセス」(阿部 63) と解釈されてきた。しかし本稿は Peter の “self-reliance” を失うことや、大人の男に成長する為の手本とすべきロール・モデルが不在であることから生じる不安や恐怖に注目をし、Francis を失うことで Peter の “full paradox” な人間としての人生が始まるということが “The End of the Party” のテキストに埋め込まれたテーマのひとつであることを検証してきた。これ以降 Greene は、“The End of the Party” では双子に割り当てられていた “head” (理性) と “heart” (感情) (Pierlout 137) の両方の性質を持つ複雑な登場人物を生み出していく。この、相反する要素を抱える “full paradox” な状態こそ人間そのものの姿であり、Greene 作品の中心的テーマとなっていくのである。

参考文献

- Atkins, John. *Graham Greene*. London: John Calder, 1957.
- Greene, Graham. “The End of the Party.” 1929. *Twenty-One Stories*. 1954. London: Vintage Books, 2009. 192-200.
- Herdman, John. *The Double in Nineteenth-Century Fiction*. London: Macmillan, 1990.
- Kelly, Richard. *Graham Greene*. New York: Fredrick Ungar Publishing, 1984.
- Pierlout, Roland A. *Psychoanalytic Patterns in the Works of Graham Greene*. Amsterdam: Rodopi, 1994.
- 阿部曜子. 「鏡の国の子どもたち―「パーティの終わり」の双子」. 岩崎正也・小幡光正・阿部曜子. 『グレアム・グリーンの世界―その時空間を求めて―』東京：南雲堂, 2004. 43-67.
- 山形和美. 『グレアム・グリーンの世界―異国からの旅人―』東京：研究社, 1993.

注

- 1 以下、典拠を示す際には作品名を“EP”と略す。
- 2 Kelly 151.
- 3 文学における double や quasi-double のテーマの誕生と発展については、John Herdman, *The Double in Nineteenth-Century Fiction* (London: Macmillan, 1990) に詳しい。
- 4 Herdman 2.
- 5 阿部氏は Peter のナルシズムを考察する際、Peter が恐怖を感じる際に必ずそれが弟のものだと言う弁明があるため、かえって我々は実はその恐怖が兄のものであり、恐怖を「両方で共有しているのでないか」という疑念を抱かせる」と指摘している。(阿部 60)